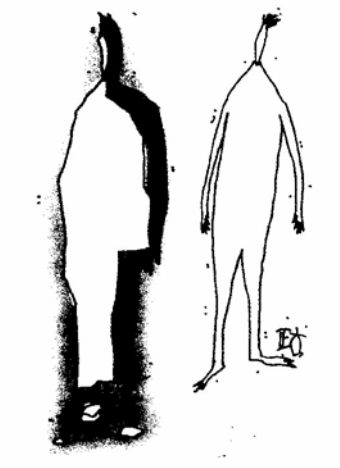
父子相伝

第 1 編 15 章

創造された人間の本性、神の形、自由意志に関して



人間は自分が求めようとするなら自分の自由意志を使って永遠の命に到達することができる十分な力を持っていました。アダムは自分が求めようとするならば、倒れることがなくてもすむことができたのですから、純粋に自分の意思で堕落してしまったと言えるのです。彼の意思は善と悪どちら側にも偏ることなく、その選択において完全な自由を持っていました。

「うりふたつ」ということばがあります。二つのものを並べてみたときに見間違うほど似ているものについて私たちはこのような言葉を使って表現することがあるのです。子供がその父母に似ていることは当然なことですが、本当にうりふたつという親子に出会うこともたびたびあります。びっくりするほどです。本当に子供たちはその親に似るものなのです。外形だけでなく、その性格までそっくりなのにはさらに驚かされます。

人間は神の子として創造された。その点でほかのすべての動物たちとは全く異なっています。神が人をそのように創造されたのです。聖書には神の形に似せて創造されたと語られています。だから堕落以前の人間はまことに完全な存在であったのです。わずかな傷ひとつもない完成品だったのです。すべての動物たちの上に立てられた独特の存在でもありました。今回はその創造のときの姿のままの人間について学んでみることにしましょう。

第 1 節　人間は傷のない完成品として創造されたために自分の罪についての責任を神様に負わせることはでません。

人間の愚かさのひとつは自分の罪を神に負わせようとするところにあります。私たちの腐敗と堕落した性質がそのような愚かな反応を神に対してさせるためなのですが、そのような本性を神が創られたものであり、私たちの罪の責任は結局、神にあるのではないかと言い張るのです。もしそうならば、人間の本性には創造されたときから欠

陥があるとういうことになり、神の実力に問題があるということになってしまうのです。

神はどこまでも神であられ、また人を完全無欠に造られたのです。もちろん人が土のちりから造られたという事実は私たちがいつも謙遜を忘れないようにさせるものなのですが、神はその土の器である私たちの肉体のうちに不滅の魂を住まわせてくださったのです。人は動物と同じように土から造られたものですが、神様から特別に魂という賜物を与えられたものなのです。

ですから聖書では人は肉体と魂とからなっていると語られているのです。「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」（コヘレト 12：7）とソロモンも歌っています。キリストも死を直前にして自分の魂を父なる神にゆだねました（ルカ 23：46）。ステファノも死を前にして天におられるキリストに自分の魂をゆだねています（使徒 7：59）。パウロも「肉と霊のあらゆる汚れから自分を清め、神を畏れ、完全に聖なる者となりましょう」（コリ第二　7:1）と信者たちに奨め、罪の汚れが人間の二つの部分に及ぶことを指摘しています。

ペトロも「魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい」（ペトロ第一　2:11、1:9、2:25）と語り、魂と肉を対峙させています。イエス様も「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」（マタイ 10:28、ルカ 12:5）と教えておられ、ヘブライ人への手紙の著者は私たちに「肉の父」と「魂の父」を区別して語っています（12：9～10）。どんなにたくさんの証言が聖書には尽くされているでしょうか。聖書は私たちが肉体と魂からなっていると明らかに語っているのです。そして、肉体と魂の中で人間にとってより重要な部分は魂です。人間だけが持っている卓越したさまざまな賜物はこの魂に刻まれた神の形からすべて現れてくるものだと言えるのです。

第 2 節　人間は神の形に創造された

人は神に「うりふたつ」だと言えるのです。それほど似ているのです。どうしてそう言えるのでしょう？聖書は神が人間をご自身の形、すなわち神の形に似せて創造されたと語っているからです（創 1:27）。それではこの神の形とは、いったいどのようなことを言っているのでしょうか。もっと簡単に表現していえば、それは完全性だといえます。

アダムは正しい理解力を持っていて、自分の感情を理性に従うことができるように導くことができました。また、言語を使い、思考しながら万物をよく保ち、治めることができましたし、神を礼拝することができるいろいろな卓越した賜物を持っていました。このすべてのものがみな人間の魂の中に刻まれた神の形から出てくるものなの

です。無論、人の体に現れる神的な栄光も驚くべきものですが、それは魂に刻まれた神の形がそのように拡大されて現れたものだと言えるのです。

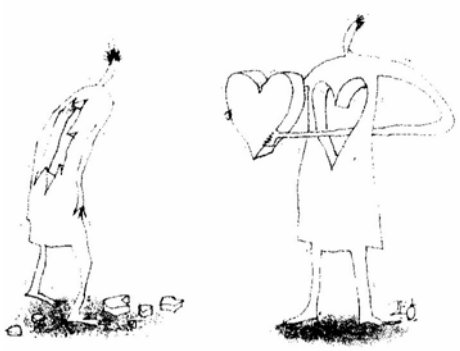
これでも神の形が何であるかが分からないのでしょうか。それならば次の場面に入っていきましょう。そうすればさらに理解しやすくなるでしょう。堕落した罪人がイエス様を受け入れて再生し、回復される場面です。人間が罪のために失ったものが何であり、イエス様によって回復されるものが何であるかを見ればよいのです。それが神の形です。

キリストは人間のうちで罪によって破壊され、腐敗した神の形を完全な本来の姿に回復させるという意味で「第二のアダム」と呼ばれています。最初のアダムは「命ある生き物」として造られましたが、第二のアダムであるキリストは「命を与える霊」となられたのです（第一コリ 15:45）。無論、再生の恵みは最初の創造の恵みより、ずっと豊かなものですが、やはりその核心は失われた神の形を回復させるところにあるのです。

次の二つの御言葉は再生こそ、回復された神の形が何であるかをよく表してくれると言っています。「造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです」（コロ 3:19）。「神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません」（エフェソ 4:24）。

再生の恵みによって私たちのうちで回復される神の形はまず知識であり、次は純潔な義と聖であると語られています。回復されたところでもっとも重要なものこそが、創造されたときにももっとも重要なものであったと言えるのではないでしょうか。ですから神の形は知識であり、義、あるいは聖なることなど当然に人間の内部から見出されるべきだと言えるのです。それは私たちの魂のうちに刻まれている神の特別な贈り物なのです。

第 3 節　魂の根本的な機能は知性（Understanding）と意志(Will)である



それならば人間の魂はどのようなものなのでしょうか。魂に対する空想も多く存在します。その中でも代表的なものをひとつあげるとすれば、昔、マニ教徒たちが主張し、その後にも再びセルベトスが紹介したものです。彼らは人間の魂が神の本質から流出したものだと語ります。神の本質を分け持ったものだというのです。それならば神の本質を分け持った人間が堕落したのは結局、神の本質も防ぐことができなかたということにな

るでしょう。神の本質も悪い欲望に汚染され、苦しめられて、各種の悪に従属することになるということになるわけです。

腐敗した人間の心を見てみましょう。人間の心は下水溝のようで、すべての汚いものの潜伏場所です。もし、人間の魂が神の本質から流出されたものであるあるならば、私たちはそのすべての不潔なものを神の本性のせいにするほかなくなります。これは考えるだけでも恐ろしい暴論ではないでしょうか。そんなはずはありません。

人間の魂は流失されたものではなく、創造されたものです。何もないところから全く新たな存在として始められたものなのです。そして私たちがイエス様を受け入れたとき聖霊の力によって神の形を回復されることとは、そのときにも罪によって破壊され、汚れてしまった魂のうちの善が回復されことであって、私たちを神様と同じ本質に造くられることではないのです(第二コリ 3:18)。私たちの魂は聖霊の力によって私たちのうちで創造されるものです。

それならば、魂が私たちのうちで行うことは何でしょうか。魂は空間的に制限されてはいないとしても、それは肉体を家のようにみなし、そこにとどまります。そして肉体の各部分に命を与え、肉体の各機関の行動を適切に導いて調和させるだけではなく、思いと行動を治め、すべての生活の義務を果たさせて、神を礼拝したいという衝動を人間におこさせるのです。無論、神を礼拝するようにさせる自覚や衝動は堕落した後の人間たちにそのまま残されているわけではありません。しかし、これも腐敗した私たちの魂のうちにある痕跡を刻み、依然として残されているのです。

プラトンなどの世のたくさんの哲学者たちが霊魂の機能についていろいろな見解を下しています。しかし、私たちは人間の魂は二つの部分、すなわち知性と意志によってなっていると信じるのです。知性がすることはある対象を認識して分別することです。そして意志がすることは知性が分別したものを選択することです。知性が善と認めたものを選択し追及して、知性が否認したものを拒絶し、避けることなのです。知性は魂の指導者であり、支配者のようであり、意志はその僕のようです。意志は知性の命令に常に耳を傾け、いつも知性の判断を受けいれたいという欲望を持っているのです。

第 4 節　自由の選択とアダムの責任

神は人間の魂のうちに心を与えてくださいました。そのため人間たちは善と悪、正義と不義を選り分けて、理性の光を案内人として仰ぎ、それが従うべきものか放棄すべきものかを区別することのできるようにしてくださったのです。世の哲学者たちはこのような指導力を行う部分を「ト・ヘゲモニコン」（ギリシャ語　指導力）と呼んでいます。神はこの指導力に従う意志をともに与えてくださいました。選択することの

出来る力を与えてくださったのです。

ですから堕落する前の人間の状態は完璧なものでした。人間の知性は神の命令通りに生きることが出来る十分な分別力と、神と永遠な幸福をともにするために不足することのない分別力を持っていたのです。ここに選択の力が付け加えられ、人間にはすべての欲求を調節し、すべての機関の活動を調節させて自分の意志を理性や知性の指導力に全的に従わせることができる力があったのです。

このような完璧な状態での人間は自分が望もうとするならば、自分の自由意志によって永遠の命に到達することができる力を十分に持っていたのです。アダムは自分が望もうとしたならば十分に避けることができましたが、自分から求めて、まったく自分の意志によって堕落しといえるのです。彼の意志は善と悪、どちらの側にもつくことができましたし、そのような選択で彼は完全な自由を持っていたのです。

これでも疑問が残りますか。なぜ神は人間に終わりまで悪を選ばないようにできる忍耐心を与えてくださらなかったのか。創造されたときに人間が罪や悪を求めないように造られたならばもっとよかったのに…。しかし、神は人間に完璧な自由意志を与えることを定めてくださったのです。完全な知性と完全な意志によって準備された人間はすこしも不足することがない完成品だったのです。

無論、それでもまだ不満は残るでしょう。なぜ、神が罪を犯そうとするアダムを踏みとどまらせる力を彼に付け加えて与えてくださらなかったのか。その理由は神の隠された予定と計画のうちにあります。私たちは私たちの領分を守って、その理性を暴走させないようにすることが知恵にかなったことでしょう。とにかく人間が罪を犯したのは父なる神をまねたものではありません。似ているとしたら、自分の本当の幸福をそのように自ら捨てることができるほどの完璧な自由を分け与えられていたその点にあるといえるのです。さらに、神は人間の意志を軟弱で、危ういものに造って、簡単に堕落させ、それによって自分が栄光を受ける機会を残そうとする必要が全くない方でもあるのです。

結論

父子相伝です。私たちは神の子供たちです。人間は創造のとき神によってそのように創造されました。神は人間に魂を与えて、そのうちに神自身の形を刻んでくださいました。そのために人はすべて他の被造物と区別された万物の霊長として立てられているのです。ですから人間は神に似せて創造されたものであり、従って神にならって生きなければならないと言えるのです。イエス様を受け入れた私たちは今、聖霊の力によって神の形を回復し、さらに豊かに回復されようとしているのです(ローマ 8:29、ガラ 4:19)。